



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## ここにしかない観光 交流で未来を拓く

インターネットの「NAVERまとめ」というサイトに、「日本国内の死ぬまでに一度は行きたい観光名所」という面白いタイトルの記事が載っていて、興味をそそられました。北から順番に北海道の摩周湖、美瑛の丘、知床などと名だたる観光名所が名を連ねていて、納得しつつ目を通し続けていると、やがて四国へと移り愛媛県内の登場です。瞬間画面を見て「えっ!!」と驚きました。どんな情報を元にまとめたのか知るよしもありませんが、何と愛媛県内では日本最古の道後温泉でも、木幡で栄えた内子の町並みでもなく、また西日本最高峰の石鎚山でもなく、次の二つが選ばれていました。気がつけば下灘駅のプラットホームから沖合いに浮かぶ青島も見え、青島からも駅周辺が一望できるのです。

### JR予讃線下灘駅「愛媛県」

大海原を独り占めできる無人駅、ホームから国道を挟んですぐ伊予灘が広がっている。ホームからは広い海を眺める事ができる。駅周辺は鉄道写真の撮影名所の一つとしてファンに知られている。あるテレビ番組の中で、「一度は降りてみたい日本の美しい無人駅 Best 3」の一つとして紹介された。



下灘駅

### 青島猫の島「愛媛県」

長浜港の沖合い13・5kmに位置する有人島。島民15人に対し100匹以上の猫の住む、まさに「猫の島」。ネットで紹介されるやいなや全国から観光客が訪れるようになった。民宿、食堂はおろか自動販売機もないこの島は、猫好



青島

きにはたまらない楽園である。

驚いたのは私だけではありません。今年のゴールデンウィークには夕方ともなると下灘駅は、車や列車でやって来た人で溢れ、下灘駅に通じる狭い道は交通渋滞が起きるほどの混雑ぶり、中には自撮り棒を持った台湾人や韓国人など外国人も沢山いて、地元の人たちは目をパチクリさせながら「こんな田舎の、こんな何も無い場所に、何でだろう?」と、首をかき上げて眺める有様でした。

思い起こせば昭和62年をまちづくり元年と定めて、まちづくりに取り組むようになった市町村合併前の双海町は、当時三千二百余りあった全国の市町村の中で、知名度は最下位クラスに甘んじて、県庁所在地松山から僅か二十五キロしか離れていない所にあるのに松山の人にさえ、「双海町って何処?」と言われる始末でした。当然町民も二言目には「何ちゃやない、何ちゃやない」と諦めの言葉を連発していました。

ところがところがです。無人の下灘駅、プラットホームで夕やけコンサートをやったところ約千人の人が集り、マスコミの後押しもあって「夕日の美しい町」として名乗りを上げたのです。「沈む・落ちる・没する」

という夕日のマイナスイメージや、何処にでもある夕日ゆえに最初は反対意見や、懐疑的な人も多かったのですが、「始める、続ける、高める」という努力によって双海町は、あつという間に全国に知られる「夕日の美しい町」になったのです。まちづくり元年に目標として定めた「二万人の住めるまちづくり(定住人口)」は、当時六千人の人口を数えていたものの、残念ながらその後右肩下がりで、先日ついに四千人を割ってしまいました。が、「十二万人の訪ねるまちづくり(交流人口)」は目標をはるかに越える五十五万人ともいわれているから驚きです。

これまで双海町は、「何にもないから何でもできる」と、国道沿いに菜の花や水仙、酔芙蓉を植えたり、国道に夕やけこやけラインと愛称をつけて道路地図に載せたり、またふたみシーサイド公園などの拠点施設を造つたりと、年間を通じて色々なアイデアある活動を多くの人々がボランティアにかかわり、楽しい・新しい・美しいことをキーワードとしてまちづくりに取り組んできましたが「しずむ夕日が立ちどまる町」という全国公募して選んだキャッチフレーズそのままに、色あせることなく今も輝いているのです。はてさて、観光資源など

何も無いと思われる小さな町が輝いているのは、一体何がそうさせるのでしょうか？

日本海に浮かぶ島根県海士町のキャッチコピーを借りれば、双海町には「ないものはない」のです。この言葉には「二つの意味があつて、「ないものはない」と開き直つて「ないものねだり」しないこと、「ないものはない」と思つてた足元に観光資源がゴロゴロ転がっていることを上手く掛け合わせて表現しています。夕日も無人駅も何処にでもあるものですが、これをオンリーワンに磨き上げるには、「知恵を使った人の存在」が必要です。夕日と無人駅を組み合わせることで、一十一が二ならぬ五にも六にもなつて相乗効果を生み出すのです。地元の人が無人駅をフィールドミュージアムにしようと花を植えたり、ボランティアアガイドをしたりする地道な行為が、ゆつくりと人気をはぐくみ、駅構内に咲くコスモスやヒマワリ、国道沿いに植え育てた水仙や菜の花など四季折々の花々も、観光列車「伊予灘ものがたり」の運行も立派な道具立てとなるのです。

私たちが三十年前にまちづくりを始めた頃は、インターネットがそれ程普及していない時代で、ゆえに情報発信は殆どが新聞雑誌のペーパーとテレビ映像などの公共

媒体でした。ところが最近様々な情報がネット配信され、facebook等を使ったバーチャルが次々とリアルを生んで行くのです。今では情報が独り歩きして怖い面もありますが、私たちはそんな時代ゆえに「情報の発信」をしっかりとしなければならぬようです。

金・暇・好奇心のある健康な人が、安・近・短を求めて動き回る時代になりましたが、交流はゴミ・糞・騒音という思わぬ公害も落とし、余程頑張らないと「経済効果」は中々上がらないものです。観光の目的である楽しみの発見と満足や感動を得なければ、リピーターを得ることはできません。さてこれからどうするか、「ここにしかない観光交流で未来を拓く」ことができるかどうか、気になるところです。

「死ぬまでに一度は行きたい 処何処 驚きました 鳥と駅とは」  
「何ちゃんない 地元の人 思つてる」  
無人下灘 駅に人波」  
「沖合いに 浮かぶ青島 猫の島 猫好きファン 押し寄せ戸惑う」  
「観光は 楽しみ満足 感動と 三つ揃つて リピーターとなる」  
(若松進一の実売映像)